

会長講演
沖縄県における減圧症—治療と予防12年
の歩み—

湯佐祚子

(琉球大学医学部附属病院高気圧治療室)

1974年7月に現在の琉球大学医学部附属病院の前身である保健学部附属病院に第2種高気圧酸素治療装置が設置され、同年12月に治療を開始してから1984年6月末までと、現在の新設高気圧酸素治療装置による1984年10月より1985年7月までの約12年間で治療総症例数は940例となった。この間、1974年9月に最初の潜水夫減圧症を治療して以来、他の年次的症例は変化するなかで減圧症症例は常に最多症例であり、救急として治療した症例は、本年7月末で328例となっている。これらの症例について、臨床的検討と当治療室での治療経験を主に報告したい。

沖縄県は海に囲まれ離島も多く漁業従事者が多いことから減圧症の発生も多いが、救急医療としての問題点も考えなければならない。減圧症の発生場所が常に海上、離島など再圧治療施設より遠く離れており、患者輸送の問題も含めて再圧治療の開始が遅れ、中枢神経系症状を示した重症Type II減圧症症例(特に脊髓型)での再圧治療の効果は良好とはいえない。

再圧療法は初期には空気再圧療法で施行したが、現在は重症例は酸素再圧法(主にU.S.Navy Table 6)のくり返しにより治療しているが、沖縄県での漁夫の潜水パターンは経験的な無減圧に近いもので、減圧症治療としての再圧療法の限界も感じている。長期的回復過程よりみて、高気圧酸素再圧療法につづくOHPと理学療法併用効果の可能性についても調べたい。

更に潜水パターン、減圧症に対する漁業従事者のアンケート調査の結果や複数罹患症例での骨変化の所見より、減圧症の予防対策の重要性を痛感しているが、沖縄県での対策、問題点についてもふれたい。